

いふものは孔子の教の中にこれを統一することは出来ない、何故かといへば『論語』は天道といふ事を説くにしても、「生を知らず焉ぞ死を知らんや」と言ひ、「天道はア、穆として已まず」といふ位の事を言ふのであつて、佛敎の研究とは非常にそこに淺深廣狹の別があるのである。狭きものは廣きものを容れることは出来ない、淺きものは深きものを入れることは出来ない、軍曹が師團を指揮することは出来ない、論語を以て法華經なり華嚴經なりを綜合統一するといふことは出来ない、一合樹に一升の水は入らぬ、奇蹟ならば卒知らずであるが……。それ故に事實はこれを證明する、論語のみを楯に取つた所の物徂徠でも、林羅山でも、伊藤仁齋でも、その他のあらゆる儒者は、排佛家は澤山あるけれども、佛敎と融合してさうして佛敎を發揮するやうな者は居らぬ、純粹の儒者といふものはすべて佛敎を敵視したる固陋な者である。然らば神道の敎はどうであるか、神道の敎それ自身が直ちにこの偉大なる法華經を融合するかといふと、神道の根本精神としては無論融合するのである、非常に廣い所の鏡の

如き精神で、善きを採り惡しきを捨てるといふ廣大なる敎であるけれども、所謂神道家と稱する所の者はどうであるか、これは度會延佳であつても、或は古川惟足であつても、平田篤胤であつても、今の神官者流でも、國學者でも、今なほ國學にのみ頭を突込んで居る人々は、固陋なもので淺薄なものである、さう言うたら怒るか知らんけれども、怒つたと言はざるを得ない。我が文化史を大觀するときに、彼等は何時何排斥的の固陋なる態度を執る、最初守屋が即ちその代表者である、佛敎は夷狄の敎である、そんなものは入れていかぬと言つて闘かつた、それは遂に戰に敗けたから彼は倒れたものであるけれども、彼に權力を興へて置いたらば、何處までも佛敎を排斥したのであらう。爾後聖德太子の如き偉人あり、歴代賢明の天皇があつて、高僧碩德輩出して終にどうする事も出来なくなつたけれども、時々折を窺つてはこれを倒さんとして、所謂佛敎の息の音を止めると言つたり、或は唯一神道が起つて佛敎の撲滅を圖つたりした、幸に天海僧正があつて、その厄難を遁れたけれども、それが段々來て終